

## 「読む将」のススメ展」開催報告

杉本佳奈

町田市民文学館ことばらんど（東京都町田市）では、

二〇二二年四月二十九日から六月二十六日にかけて、企画展

「将棋作品をひもとく！ 読む将」のススメ展」を開催した。

近代以降の将棋を題材とした文学作品の歴史を辿り、作家の直筆原稿や取材メモ、マンガ原画、愛用の駒などの多彩な資料を展観。時代によって変化してきた将棋の楽しみ方の変遷を追いながら、各時代に生まれた作品を紹介する展示構成とし、小説、随筆、俳句、短歌、マンガ、アニメ、映画、作家が書いた観戦記といった様々なジャンルの作品を取り上げた。本稿は、本展を担当した学芸員である筆者が、準備から実施の記録を簡潔にまとめたものである。今後、他機関で同様の展覧会を企画することがあった折などに一助となれば幸いである。

展覧会の企画を提案したのは、二〇一八年夏のこと。以前から将棋を題材とした文学作品が多くあることには個人的に関心

を抱いていたが、この時期に、将棋作品としては羽海野チカ『3月のライオン』や白鳥士郎『りゅうおうのおしごと！』のアニメ化、大崎善生『聖の青春』や瀬川晶司『泣き虫しよったんの奇跡』の実写映画化などのメディアミックスが相次ぎ、将棋では史上最年少棋士としてデビューした藤井聡太の活躍、羽生善治の永世七冠達成と国民栄誉賞受賞など、将棋ファンのみならず世間的に大きな注目を浴びる話題が続いていた。時流に沿ったテーマであるということで企画が通り、二〇二一年度中の開催が決まった。二〇一九年夏には日本将棋連盟に協力依頼の打診を済ませ、展示の内容を固めるために資料調査や先行研究調査を進めていたが、新型コロナウイルス感染症の影響でいくつかの企画展の開催が延期となり、本企画は一旦白紙に。二〇二一年六月になって翌年度春季の開催が決定し、そこから本格的な準備を始めた。

まず、資料調査の結果を踏まえて展示構成を検討した。当館の展示室の規模であれば、紹介する作品のある時代のものに限定しても企画展を成立させることができるほど、各時代に豊富な作品数・資料数があることは確認できていた。また、手法としてはノンフィクションやライトノベルといったジャンル別、〆元奨を描いたものや女流棋士をテーマにした作品など主題別に紹介することも検討したが、一作品の中に様々な要素が絡

んでいることが多く、書かれた時代背景、作者や作風も全く違う作品を一括りにするのは困難という結論に至り、無理に分類する方法は取らないことにした。将棋を題材とした作品は、将棋受容の変化や同時代の将棋界の動向を反映していると考えていたため、それを見せるためには編年体にするのが適切だと判断し、近代から現在までを四つの時代に分けて、各時代の代表的な作家・作品を紹介していく構成とした。

資料としては、ジャンルや表現方法にこだわらず広く将棋を描いた文学作品の関連資料を選定し、神奈川近代文学館をはじめとした博物館施設、作家本人などから借用した。また、文学資料だけではなく、作家の愛用した駒等、将棋関連の物品も展示することにした。出品資料の詳細は、一覧表を参照していただきたい。なお、本展ではコロナの影響により遠方からの資料借用は断念せざるを得なかったが、将棋と文学に関連する重要な資料は今回取り上げたほかにも数多くあることを言い添えておきたい。

展覧会タイトルは、当初「将棋文学展」の仮称をつけていたが、マンガやアニメなどの作品も紹介する内容のため、固いイメージにならないように再考した。一般の方には馴染みのない「読む将」という単語を思い切って使ったのは、あえて引っ掛かりを覚えさせることで関心を引く狙いがあった。ただし、タ

イトルだけで「将棋」に関連することは伝えたいと考え、副題として「将棋作品をひもとく」と付けて意味を補完した。

ポスター・チラシ等の広報物のメインビジュアルについては、担当者としては当初、一作品のイラストで展示全体の内容を表現できないという懸念があり、将棋駒や本などをモチーフとして「将棋と文学」を想起するようなデザインにしようかと考えていた。他の学芸員とも議論を重ねた結果、インパクトを与えることを重視して作品を用いるべきという方向性に決まり、若い世代の来館を促したいという館の方針もあって、二〇二二年七月からのアニメ放送開始が発表されていた山本崇一朗『それでも歩は寄せてくる』のイラスト使用を打診することにした。無事にご快諾いただき、うるしと歩が将棋盤の前に並んだ第一局雑誌掲載時の扉絵を用いたデザインになった(画像1参照)。

会期中には、関連イベントとして対談、講演会、文学散歩を実施。当館Twitterアカウントでは、展示作品の一部を紹介する「推し本」企画を開催して多くの反響を得られた。『朝日新聞』「神奈川新聞」をはじめとした新聞各紙に展覧会紹介記事が掲載されたほか、『別冊少年マガジン』六月号掲載の伊奈めぐみ「将棋の渡辺くん」作中では、本展準備中のエピソードが紹介された。

本展は、将棋と文学をテーマにした初めての展覧会という



【画像1】 展覧会チラシ表面

ことで、着眼点がよく先駆的な企画だったと評価していた。来館者アンケートの結果から、観覧者傾向は二十代が十二%、三十代が十二%、四十代が十九%、五十代が二十二%、六十代が十四%と、幅広い世代に関心を持たれていたことがわかった。近代以降の文学との関わりというテーマに絞った内容ではあったが、「将棋の歴史も追える構成になっていて興味深かった」という感想もいただいた。

最後に、本展の開催に際してご協力を賜った多くの関係者、関係機関に、この場を借りて御礼申し上げます。

岡田市民文学館(こぼらんび) 学芸員

## 実施報告

### ■ 解説文 ■

#### プロローグ

「読む将」とは？

将棋は古代インドのチャトランガという盤上遊戯を起源とし、平安時代中期には成立していたと考えられています。十五〜十六世紀には持ち駒の使用ができる日本独自のルールが作られ、九×九マスの盤と四十枚の駒を使用する現在の将棋(本将棋)が生まれました。現在の参加人口は五百三十万人と言われ、広く親しまれています。

将棋の楽しみ方は、指すことだけではありません。十年程前から対局のネット中継が行われるようになった影響で、観戦を趣味にする「観る将」と呼ばれるファンが増え、現在ではその派生形として将棋関連の文章を読む「読む将」、棋士のイラストを描く「描く将」や将棋イベントの写真を撮影する「撮る将」などが現れ、将棋の楽しみ方が多様化しています。

「将棋関連の文章」と一言で言っても、定跡や詰将棋を解説する棋書、対局の観戦記、棋士のエッセイやインタビュー記事、小説やマンガなどの創作物と多種多様です。本展ではそのうちの文学作品に焦点を当て、近代から現在に至るまでの歴史を辿

ります。将棋のことはよく知らないという方も、本展を通して将棋の世界に触れ、読む将棋の第一歩を踏み出してください。

## 第一章

### 将棋×文学のはじまり〜明治から戦前〜

明治から昭和初期、文士の傍にはいつも将棋がありました。日本近代文学の幕開けとなった坪内逍遙の小説論『小説神髓』には、それまで日本にはなかった「小説」という概念を伝えるために、身近な存在であった将棋がたとえとして用いられています。また、将棋と小説はどちらも、近代において新聞を通じて発展しました。

『小説神髓』と出会い文学の道を志した幸田露伴は、近代文学を代表する作家であり、将棋史研究の基礎を築いた人物でもあります。

露伴とともに文壇の愛棋家と称される菊池寛は、自ら創刊した「文藝春秋」誌面に将棋関連記事を掲載、棋士の支援も積極的に行いました。来客があると、まず社長室に置かれた将棋盤で一局指すのがお決まりとなっていたため、そこに自然と文壇の将棋サロンが形成されました。

日本におけるミステリの草分けである江戸川乱歩も将棋を趣味とし、探偵小説と将棋の類似性を指摘しています。

### ◆井伏鱒二と将棋を通じた文士の交遊

戦前から戦後にかけて、文学者の将棋サロンとして最大規模を誇った阿佐ヶ谷将棋会。一九三八年、井伏鱒二の直木三十五賞受賞を祝して、阿佐ヶ谷駅前の中華料理店・ピノチオに集まったのが始まりです。阿佐ヶ谷将棋界には井伏のほかには太宰治や安成二郎、上林暁、木山捷平といった阿佐ヶ谷界隈に住む三十人ほどの文士たちが参加し、時には文藝春秋、早稲田、創元社、本郷などほかの文士将棋会との対抗戦で親睦を図りました。戦時下、仲間が次々と召集されていく状況下で「清福を楽しむ」ことを目的に行われていたようです。

戦後、阿佐ヶ谷将棋会は「阿佐ヶ谷会」と名を変えて将棋を指す機会は減り、一九七二年には解散しますが、井伏の将棋を通じた交遊は続きました。小沼丹や三浦哲郎、庄野潤三、観戦記者の天狗太郎らと将棋を楽しんだほか、近くに住んでいた棋士・大山康晴とも交流しました。

## 第二章

### 棋士への関心の高まり〜戦後昭和〜

戦時中は下火となっていた庶民の将棋熱は戦後間もなく再興し、全国各地で縁台将棋が行われるようになります。文学界では、近代の既成文学への批判を行った無頼派と呼ばれる作家た

ちが、自らの文学論を将棋になぞらえて展開しました。特に織田作之助は棋士・坂田三吉に強い関心を寄せて、自らの文学と重ねました。織田の影響を受けた北條秀司による戯曲『王将』は、映画化、テレビドラマ化もされて国民的ヒット作となります。

一般家庭にもテレビが普及した一九六二年にはテレビ棋戦が始まり、お茶の間でプロの対局姿を見ることができるようになりました。山口瞳や藤沢桓夫といった作家たちは、文章を通じて個性的な棋士たちの魅力を伝えました。

賭け将棋で生計を立てる「真剣師」を題材にした作品や、将棋ミステリが数多く生まれたのもこの頃です。

### 将棋になぞらえた文学論

織田作之助は評論『可能性の文学』で、一世一代の大勝負において初手で端歩を突くという定跡破りの手を放った棋士・坂田三吉と自分を重ね合わせ、志賀直哉を代表とする「日本の伝統的小説の定跡」を最高権威とする文壇を批判、文学の可能性を切り開いていく気概を綴ります。発表直後に死去したため本作が絶筆となりますが、それに続くように坂口安吾は「大阪の反逆」や「坂口流の将棋観」、太宰治は『如是我聞』で、将棋にたとえながら文壇の権威を批判する挑戦的な文学論を展開しています。

### 坂田三吉を描いた作品

北條秀司の戯曲『王将』は、貧しい生まれながら独学で将棋を学び、天才とうたわれた坂田三吉の破天荒な生涯を描いています。辰巳柳太郎が主演した一九四七年の初演以来、何度も再演され、映画化、テレビドラマ化も繰り返しられています。この作品によって、戦後下火だった国民の将棋熱は復活しましたが、創作物として誇張された面やフィクションの部分も事実だと受け取られ、偏った棋士像を定着させることにもなりました。

一九六一年には、同じく坂田をモデルとした楽曲「王将」（西條八十・作詞、船村徹・作曲）を村田英雄が歌い、大ヒットしています。

### 棋士の魅力を伝える

対局料だけでは生活ができない棋士が多かった時代、山口瞳は、個性的な棋士たちを一般の人に知ってもらうために自戦記を発表します。当時、第一線で活躍中だった米長邦雄や中原誠、大山康晴といった棋士と駒落ちで対局し、棋譜の解説だけでなく、魅力あふれる棋士たちの素顔を小説風に紹介し、大きな話題を呼びました。

一九八七年には、将棋と文章を愛する作家や棋士、新聞棋戦の解説を書く観戦記者などの親睦団体「将棋ペンクラブ」が設

立されています。

### 『真剣師』という生き方

昭和後期までは、棋戦に出場して対局料や賞金を得る棋士とは別に、賭け将棋で生計を立てる『真剣師』が存在していました。

真剣師を主人公とした夢枕獏『風果つる街』は、「新宿の殺し屋」として名を馳せた小池重明の存在に影響を受けて書かれました。小池に惚れ込み、晩年を支えた団鬼六は、その破滅的な生涯を『真剣師小池重明』としてまとめています。

棋士とはまた別の魅力を感じさせる真剣師は、実際にはいなくなつた現在も様々な作品に登場しています。

### 将棋ミステリ

江戸川乱歩が「将棋はどこか探偵小説的な味を持っている」と指摘したとおり、様々な可能性を検討する視野の広さやひらめき、相手の思考を読む力など、将棋とミステリには共通したものがああります。

元々、探偵作家クラブ（現・日本推理作家協会）では将棋会が開かれるほど愛棋家のミステリ作家は多くいましたが、一九六六年に江戸川乱歩賞を受賞した斎藤栄『殺人の棋譜』を皮切りに、多くの将棋ミステリが書かれるようになりました。

日影丈吉「将棋を指す鸚鵡」のように、将棋の専門誌に連載された作品もあります。

## 第三章

### スター棋士の誕生とサブカルへの広がり

#### 〜平成〜

平成に入り、「羽生フィーバー」と呼ばれる社会現象が起りました。史上最年少で竜王位を獲得、一九九六年には全タイトルを独占した羽生善治の活躍は、若い女性将棋ファンが生まれるきっかけとなります。村山聖、佐藤康光といった羽生世代の棋士も注目され、作品のモデルにもなりました。

平成期の作品の特徴として、女性の書き手が増えたことや、近年相次いで映画化された大崎善生『聖の青春』、瀬川晶司『泣き虫しよつたんの奇跡』などノンフィクションの名作が生まれたこと、能條純一『月下の棋士』を筆頭としたマンガやライトノベルといったサブカルチャーの将棋作品が人気を得たことが挙げられます。羽海野チカ『3月のライオン』、白鳥士郎『りゅうおうのおしごと!』、伊奈めぐみ『将棋の渡辺くん』、山本崇一朗『それでも歩は寄せてくる』など、様々な目線から将棋を描いたサブカル作品が若い世代を中心に楽しまれています。

※第三章には節は設けず、作品ごとに資料を紹介した。

#### 第四章

#### 多様化する将棋の楽しみ〜平成から令和へ〜

二〇一〇年代に入り、ネット配信で対局の中継や将棋の番組が放送されるようになると、棋士の人柄やファッション、対局の合間にとる食事やおやつなどにも注目が集まるようになりま  
す。〓観る将棋〓と呼ばれるファンも増え、将棋の楽しみ方が広がりました。

また、近年はコンピュータ将棋ソフトの精度が格段に向上したことにより、将棋道場などに足を運ばなくても、アプリを用いて一人で対局を楽しむことができるようになりました。AIの進歩は、棋士とコンピュータの対局が企画されたり、対局の中継において形勢判断が数字で表されたりと、プロの世界にも影響を及ぼしています。

こうした将棋界の大きな変化を受けて、棋士と食をテーマにした作品やAI作品をモチーフにした作品が生まれるなど、創作の世界にも新しい風が吹いています。

#### 棋士の食事・おやつ

プロの公式戦には持ち時間が決められていて、最長の名人戦七番勝負では各人九時間、二日間かけて一局が行われます。長時間にわたり思考を巡らせるため、食事休憩が挟まるだけでな

く、盤に向かいながら栄養補給の飲食をすることもあり、〓観る将棋〓にとっては対局者の個性や心理を推察できるポイントになっていきます。近年は、人気棋士が選んだ昼食がワイドショーに取り上げられたり、同じおやつを買い求める人が続出したりと話題になっていきます。

松本渚『将棋めし』には実在する店のメニューが登場し、対局に挑む棋士の心理が食べ物と絡めて描かれています。

#### AIの進歩と将棋界への影響

棋士とコンピュータ将棋ソフトが対局する非公式棋戦として行われた電王戦はニコニコ生放送で配信され、若い世代を中心とした新たな将棋ファンを獲得するきっかけとなりました。この電王戦に材を取った映画「AWAKE」は、ソフト開発者の視点から棋士との対局を描いています。

現在多くの対局中継では、形勢をAIによって数値化した「評価値」が画面上に表示されますが、AIが出した最善手が指されなかった場合に心ないコメントが流れることもあります。そんな光景への違和感から生まれたのが、芦沢央『神の悪手』に収録された短篇小説「盤上の糸」です。

## エピソード 将棋作品のこれから

将棋を題材とした文学作品は、その時々々の将棋界の動向も反映しながら生まれてきました。二〇一七年に史上最年少棋士としてデビューして以降、破竹の勢いで活躍している藤井聡太の影響を受け、現在再びブームを迎えている将棋。

プロによる団体戦が企画されたり、将棋をスポーツとして捉えたり、将棋をベースとした新たなゲームが考案されるなど、新時代を迎えています。このような変化を受けて、これからのどんな作品が生まれてくるのか期待しながら、ぜひ「読む将棋」ライフを楽しんでください。

## ◆将棋に魅せられた作家たち

十の二百二十乗という天文学的な組み合わせがあると言われている将棋の指し手。対局は、無限の可能性の中から一手一手が選ばれ、二人が対話するように進められていきます。そこに言葉を選び物語を紡いでいく文学との類似性を感じてか、盤上に生まれるドラマ性に魅せられてか、近代文学の誕生以来、多くの作家が将棋に関心を持ってきました。

このコーナーでは、作家愛蔵の駒や、小説家の視点で書かれた観戦記、将棋が詠まれた俳句や短歌をご紹介します。

## ■ 主な資料のキャプション ■

※資料名の前の数字は出品資料一覧の番号

## 5 安成二郎『夜知麻多』

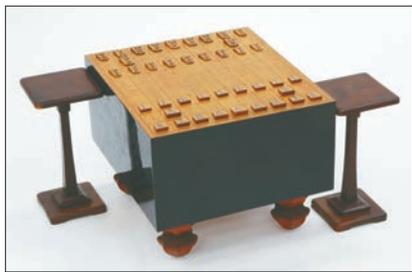
歌集。「歌づくり将棋をさしてをらるべき身と思はねどこれぞ楽しき」「新聞の将棋読みをりてこの朝も膳の味噌汁を冷ましけるかも」といった将棋にまつわる短歌が収められているほか、露伴宅を訪れた際のことを「八畳の客間すがしく菊さして床の間に置くは将棋盤のみ」などと詠んでいる。

## 7 安成二郎『白雲の宿』

随筆集。「露伴先生と木村名人対局」では、一九三三年一月十三日、露伴が自宅に木村義雄を招き、初手合いをしたときの棋譜を掲載している。久々に棋士と対局をする機会を得た露伴は、床の間に香を焚き、自分で茶を入れて歓待し、新しい白檀の盤と自分で字を書いた駒を用いたという。

## 12 「文藝春秋」第二卷第三号

「文壇敗退将棋（第一回）」掲載。対局者は里見淳と田中純、菊池寛が講評、木村義雄が総評を担当している。菊池は「将棋の分からない方には気の毒だが、編集者の道楽だと思つて許し



【画像2】江戸川乱歩旧蔵将棋盤・駒・駒台  
(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵)



【画像3】画像2の将棋盤裏面

てくれたまへ」と綴り、出場予定者として久米正雄、佐々木茂索、直木三十五、川端康成、小川未明などの名前を挙げている。

#### 15 江戸川乱歩旧蔵将棋盤、駒、駒台 (画像2参照)

盤は懇意にしていた宮松閑三郎七段(当時)の口利きで購入したものの。側面は漆塗。裏面には関根金次郎十三世名人の揮毫「勝機」「昭和十三年十月吉日」「十三世名人 関根金次郎」と駒型の押印がある(画像3参照)。駒は豊島龍山作、書体が安清の盛り上げ駒。展示した際の盤面は、一九五〇年に行われた大下宇陀児対乱歩戦の投了図を再現した。本局は探偵作家クラ

ブの将棋会として日本将棋連盟本部で行われたうちの一局で、「将棋世界」一九五〇年三月号に、探偵作家クラブの会員・高柳敏夫七段(当時)の解説付きで紹介された。

#### 23 井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』

第六回直木三十五賞受賞作。授賞式の通知を受けた井伏が羽織袴で文藝春秋社社長室を訪れたところ、菊池寛は来客と将棋を指し、社員の永井龍男らがそれを観戦しているのを目の当たりにして驚いたという。受賞祝いをピノチオで開催したのが、阿佐ヶ谷将棋会の始まり。

#### 27 ピノチオ想定復元図

大正末に永井龍男の次兄が開いた中華料理店。店名の「ピノチオ」は、当時評判となっていた佐藤春夫の翻訳童話からとられた。阿佐ヶ谷将棋会はこの店の離れで行われていた。本図は『杉並文学館―井伏鱒二と阿佐ヶ谷文士』展示図録(二〇一〇年 杉並区立郷土博物館)に掲載されたもの。

#### 28 上林暁・浜野修 将棋二百番星取表

暁の杜(上林)と浜野里(浜野)が三年越しで指した阿佐ヶ谷将棋会の星取り表。井伏鱒二『荻窪風土記』でも触れられて

いるもの。欄外には、井伏鱒二（井伏鱒二）、小田ヶ嶽（小田嶽夫）、亀井山（亀井勝一郎）、太宰渴（太宰治）、捷平山（木山捷平）、地平洋（中村地平）、古ヶ谷（古谷銅武）、田畑川（田畑修一郎）、阿佐ヶ谷（安成二郎）の名が連ねられている。

### 30 将棋竹帛杯トロフィー

三浦哲郎旧藏品。将棋竹帛会は、一九六八年十月二十日に、藤原審爾の肝入りで発足された将棋会。「竹帛」は古代中国で竹簡や布帛に文字を書いたことから書物や歴史を指すことを意味し、優勝者は優勝カップに名前を書いたりボンを結びつけるならわしになった。井伏鱒二宅（後に小沼丹宅）において開かれ、三浦、庄野潤三とその息子、将棋評論家の天狗太郎（山本亨介）、画家・新本燦根などが参加した。

### 37 織田作之助「可能性の文学」原稿

「改造」一九四六年十二月に掲載された。掲載されたものと比較すると異同が多いため改稿を重ねたことが窺えるが、直筆原稿は部分的にしか残ってないため詳細は不明。

### 43 「学園新聞」

井上靖の詩「半生」掲載。一九三一年に坂田三吉が関根金次

郎と対局した際に残したとされる言葉「銀が泣いている」に感化されて書かれた。推敲されて『詩集 北國』に収録された。

### 45 北條秀司『王将』

表題作のほか三作品を収録。「王将」は新国劇のために書き下ろされた戯曲。本書に収められたのは、坂田三吉と関根金次郎との初手合いから、坂田の妻・小春の死までを描いた第一部。その後「続王将」として第二部、「王将終篇」として第三部が書かれ、十幕十二場の全三部構成となった。

展示したのは神奈川近代文学館の西條八十文庫のもので、西條宛献呈署名本。

### 47 劇団青年座『王将』チラシおよびパンフレット

主演・緒形拳。緒形は高校生の頃に辰巳柳太郎主演の『王将』を観たことがきっかけで役者を志し、文化祭で同作を上演した際にも坂田を演じている。パンフレットには北條秀司の「拳へ」、倉島竹二郎の「坂田翁の心意気」、升田幸三の談話「三吉についてのあれこれ」などが掲載されている。

### 57 創棋界『白雨―創棋界詰将棋作品集―』

「朝日新聞」「将棋世界」や「詰将棋パラダイス」に掲載され

た藤沢桓夫の創作詰将棋が再録され、自作解説も寄せられている。タイトルは藤沢が命名、表紙の書き文字も藤沢の手によるもの。

### 58 将棋名人戦・毎日新聞復帰記念「特別棋戦」第一局

千駄ヶ谷の将棋会館で行われた対局。大内延介棋王(当時)・丸田祐三九段戦、加藤一二三九段・二上達也九段戦を大山康晴十五世名人、山口瞳、斎藤栄が観戦している。この頃から、観戦記に作家が起用されることが多くなった。

### 59 井上光晴 創作ノート

中原誠五冠(当時)に加藤一二三九段が挑んだ第二十八期王将戦第二局の観戦記の原稿が書かれている。中原の封じ手2五歩を見て控室の棋士たちがざわめき立ち、検討を繰り返す様子や、「松の内なのでカツ丼しか用意していない」という係の者に、天ぷら定食はできないのかと再度問い返す加藤棋王の金時に似た顔には、まるで童子の表情に浮かぶ理不尽さがあふれているなど、盤外の対局者の様子に至るまでつぶさに捉えて書き留めている。

### 60 「将棋ペンクラブ通信」創刊号

井上光晴による「将棋とは何か」を巻頭に掲載。団鬼六は「棋士が将棋を指して作った一局の棋譜が原作だとするならば観戦ライターはその原作を映画化する人だ」「名人戦の名局を観戦記ライターの名調子で読んだ時の感激というものは文芸の名作を読んだ時の感動と相通じるものがある」と綴り、観戦記者の専門性を高く評価している。ほかに作家として山口瞳、三浦綾子、津村秀介、斎藤栄、観戦記者として山本亨介や木屋太二、棋士として二上達也や加藤治郎などが寄稿している。

### 61 「季刊将棋ペンクラブ」第二号

一九八八年一月三十日に、東京・将棋会館の大広間と特別対局室で行われた第一回文壇将棋大会の様子が紹介されている。山口瞳、渡辺淳一、色川武大が世話人を務め、作家やマンガ家、編集者や俳優など八十一名が参加。原田泰夫、谷川浩司といった棋士も参加して賑わった。

### 69 斎藤栄『殺人の棋譜』

第十二回江戸川乱歩賞受賞作。応募の際は「王将に兇あり」というタイトルだったが、選考委員の一人である木々高太郎の助言により改題して刊行された。

## 115 『りゅうおうのおしごと!』 一卷プロット(抜粋)

一卷執筆前に書かれたもの。ライトノベル作品として将棋を題材とする意義を示し、キャラクター設定や各章の詳細プロット、続編の構想などを約一二〇〇〇字にわたって綴っている。

## 116 『りゅうおうのおしごと!』タイトル案

「JS (じえーえす)」「最弱な竜王と小学生な弟子」「あいがかり」「竜王? つよいよね。」など多数の案があったことがわかる。最終的に採用された「りゅうおうのおしごと!」は、編集者からの提案。

## 121 『将棋めし』取材ノート

作中での最終局の対局場として設定された、山梨県甲府市にある常盤ホテルを取材したときのもの。常盤ホテルでは実際にタイトル戦が行われている。また、井伏鱒二や山口瞳、松本清張が定宿にしていた。

## 129 『AWAKE』撮影に使用された将棋駒

稚山作、書体は菱湖の彫り駒。山田篤宏監督が木下グループ新人監督賞グランプリの賞金を使い、東京・将棋会館の売店で購入したもの。撮影前には、若葉竜也が持ち歩いて指し手の練

習をするのに用いた。

## 134 芦沢央・若島正 往復メール

詰将棋を題材とした「ミイラ」執筆に際して、詰将棋作家・若島正に相談した際のやり取り。芦沢が作品のアイデアを伝えたわずか七時間後に、若島が例題を作って提示していることがわかる。

## 140 尾崎一雄旧蔵将棋駒

安清作の書き駒。樺製の将棋盤と共に、俳優・上山草人が秘蔵していた大名道具を尾崎士郎が引取り、士郎の没後に遺族が一雄に贈ったもの。サイズは歩兵が高さ三・三センチメートル、幅二・六センチメートル、王将が高さ四・三センチメートル、幅三・七センチメートルとかなり大きい。本資料については、「将棋世界」一九七二年十二月号掲載の尾崎一雄のエッセイ「樺の将棋盤」に詳しい。

## 143 中島敦旧蔵将棋駒

女流駒師・増田信華作、書体は金龍の彫り駒。敦が教師として勤めていた横浜高等女学校(現・横浜学園高等学校)の卒業生から、将棋盤、駒台と共に贈られたもの。

※解説文およびキャプションは基本的に展示したものが、寄稿にあたり多少手を加えた部分があることをお断りしておく。

## ■ 関連イベント ■

芦沢央（作家）×佐々木大地（棋士） 対談

「将棋小説のたのしみ」

実施日…二〇二二年五月七日

『神の悪手』を元に、執筆のきっかけや裏話、棋士の視点からみた作品の描写等について、お二人に語っていただいた。開催の前週に佐々木が七段に昇段、前日に第三十五期竜王戦五組ランキング戦優勝を果たしたお祝いに始まり、終始和やかな雰囲気イベントとなった。

小谷瑛輔講演会 「文学の中の将棋」

実施日…二〇二二年五月二十八日

坪内逍遙に始まり夏目漱石、菊池寛、芥川龍之介など、近代文学の中に描かれた将棋とその意味についてお話しいただいた。

文学散歩 く将棋会館周辺を歩くく

実施日…二〇二二年六月十一日

将棋作品に登場するスポットおよび、村上春樹ゆかりの地など周辺の文学関連の地も巡った。所要時間は解説含めて二時間四十五分、歩行距離は五キロメートル程度。

主なルート J R千駄ヶ谷駅構内「王将」駒↓新将棋会館移

転予定地↓ハ将棋めしVステーキ屋CHACOあめみや・東京厨房・アンフォラ↓「3月のライオン」マンホール↓ハ将

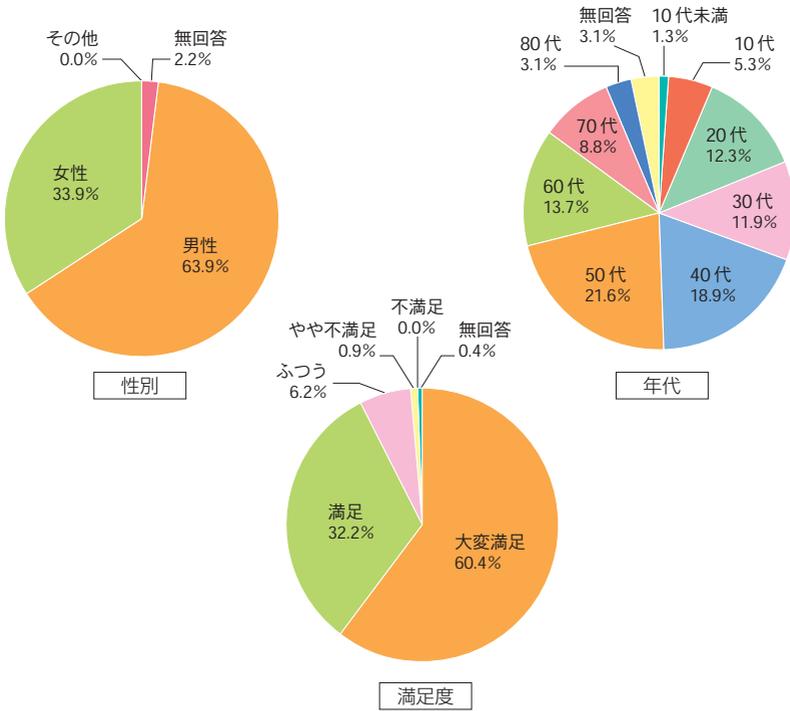
棋めしV鳩やぐら・L A I T I E R ↓東京新詩社跡↓鳩森八

幡神社↓将棋会館↓ハ将棋めしVほそ島や↓外苑西通り（ビ

クタースタジオ・河出書房新社・ホープ軒）↓国立競技場・秩

父宮記念ギャラリー↓神宮球場↓明治神宮外苑いちよう並木↓

青山霊園↓東京メトロ乃木坂駅



自由記述欄より

将棋はテレビで見ただけじゃないと強く感じました。将棋は推理小説に似ると乱歩が言った通り、将棋には盤上だけに取まらない魅力的なポイントが多数あり、その1つが文学として表れていることがよくわかるいい企画展でした。(十代)

特別将棋に興味があるわけではなく、なんとなく来てみたが大変面白かった。文士たちのたしなみであり、かつては庶民に広く愛されていたこと、それが今はマンガやミステリ等で親しまれていることが興味深かった。『神の悪手』は読んでみたい。(三十代)

作家の方の観戦記は、まさに文学作品というべきレベルの高さで胸を打たれた。明治から令和までの文学作品が一堂に会し、かつ堅苦しすぎず、見どころの多い展覧会だった。(五十代)

## 「読む将、のススメ」出品資料一覧

備考欄【※】：本文【主な資料のキャプション】参照

No.	種別	資料名	年	所蔵・提供機関等	備考
<b>第一章 将棋×文学のはじまり～明治から戦前～</b>					
1	書籍	坪内逍遙『小説神髓』 (復刻版・日本近代文学館)	1983年	町田市市民文学館蔵	
2	印刷物	明治時代の新聞記事(複製)			幸田露伴「五重塔」第1回目掲載の「国会」1891年11月7日号、初めての新聞棋戦である川井房郷六段対簗太郎五段戦が掲載された「万朝報」1908年9月11日号。
3	切り文字	幸田露伴 「将棋は玄妙なる娯楽の具なり。～」			出典は『露伴全集別巻上』(1980年岩波書店)。初出は1899年刊行の小野五平『将棋秘訣』に寄せた序文。
4	書籍	幸田露伴『碁と将棋』 (国史講習会)	1922年	アカシヤ書店蔵	
5	書籍	安成二郎『夜知麻多』 (草木屋出版部)	1938年	神奈川近代文学館蔵	※
6	書籍	安成二郎『子を打つ』 (アルス)	1925年	神奈川近代文学館蔵	短編小説「将棋」収録。
7	書籍	安成二郎『白雲の宿』 (越後屋書房)	1943年	神奈川近代文学館蔵	※
8	切り文字	菊池寛「将棋はとにかく愉快である。～」			出典は「将棋世界」第1巻第2号。
9	雑誌	「将棋世界」 第1巻第2号	1937年 11月	アカシヤ書店蔵	菊池寛「将棋哲学」、角田喜久雄「個性ある棋士」掲載。
10	雑誌	「新小説」 第26巻第10号	1921年 10月	神奈川近代文学館蔵	菊池寛「将棋の師」掲載。
11	雑誌	「文藝春秋」 第1巻第11号	1923年 11月	神奈川近代文学館蔵	菊池寛「石本検校」掲載。
12	雑誌	「文藝春秋」 第2巻第3号	1924年 3月	神奈川近代文学館蔵	※

13	書籍	倉島竹二郎『将棋太平記』 (日東出版社)	1949年	アカシヤ書店蔵	倉島は慶応義塾大学在学中から菊池と親交があった。菊池の死の前日も菊池宅で将棋を指しており、そのときに本書の序文を書いてもらっている。
14	切り文字	江戸川乱歩「将棋はどこか探偵小説的な味を持つている」			出典は「宝石」第6巻第4号。
15	その他	江戸川乱歩日蔵 将棋盤、駒、駒台		立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵	※
16	写真パネル	江戸川乱歩・大下宇陀児 乱歩邸にて	1952年	データ提供： 箕輪町郷土博物館	No.15の将棋盤を挟んで座る二人が写っている。
17	雑誌	「宝石」第6巻第4号	1951年 4月	立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵	乱歩邸にて行われた探偵作家将棋大手合の様子が紹介されている。
18	書籍	江戸川乱歩日蔵の棋書		立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵	[将棋大講座] シリーズ 全10巻 (1935-1936年 平凡社)、『将棋虎之巻』(1913年 大野萬歳館)、天野宗歩原著・土居市太郎細講『将棋精選細講』上下巻 (1924年 大野萬歳館)、木村義雄『将棋大観』(1928年 誠文堂新光社)。
19	書籍	角田喜久雄『妖棋伝』 (文化書院)	1947年	神奈川近代文学館蔵	
20	書籍	角田喜久雄『風雲将棋谷・折鶴七変化』(立風書房)	1970年	町田市民文学館蔵	「風雲将棋谷」は1938年から「講談倶楽部」に連載された作品。本書は新装版。
21	直筆物	三井永一画「風雲将棋谷」 挿絵原画		町田市民文学館蔵	立風書房版の挿絵。全7枚。

井伏鱒二と将棋を通した文士の交遊						
22	写真パネル	阿佐ヶ谷会の人々			データ提供： ホームページ 「稀覯本の世界」	木山捷平、藤原審爾、井伏鱒二、河盛好蔵、上林暁、瀧井孝作、加藤治郎八段（当時）、村上菊一郎、亀井勝一郎、青柳瑞穂、小沼丹、天狗太郎（山本亨介）、外村繫、小田嶽夫、梅崎春生、浅見淵、寺崎浩、戸石泰一が写っているもの。
23	書籍	井伏鱒二『ジヨン万次郎漂流記』（河出書房）	1937年	神奈川県近代文学館蔵		※
24	書籍	井伏鱒二『狹窪風土記』（新潮社）	1982年	杉並区立郷土博物館蔵		
25	直筆物	井伏鱒二「阿佐ヶ谷将棋会—豊多摩郡井狹村（七）—」原稿		杉並区立郷土博物館蔵		
26	雑誌	「新潮」第78巻第8号	1981年8月	杉並区立郷土博物館蔵	井伏鱒二「阿佐ヶ谷将棋会—豊多摩郡井狹村（七）—」掲載。	
27	パネル	「ピノチオ想定復元図」	1941年頃	データ提供：杉並区立郷土博物館		※
28	印刷物	上林暁・浜野修将棋二百番星取表（複製）	1939年12月20日-	データ提供：日本近代文学館		※
29	写真パネル	井伏鱒二邸にて	1961年6月29日	出典：『新潮日本文学アルバム46 井伏鱒二』（1994年、新潮社）	井伏鱒二、大山康晴名人（当時）、藤原審爾が写っているもの。写真の原本を保管している井伏家のご指示で、書籍をスキャンしたデータを使用した。	
30	その他	将棋竹帛杯トロフィー		神奈川県近代文学館蔵		※
31	雑誌	「風報」第9巻第6号	1962年6月	神奈川県近代文学館蔵	三浦哲郎の随筆「将棋盤」掲載。	
32	直筆物	庄野潤三画 対局中の井伏鱒二	1977年5月1日	神奈川県近代文学館蔵	生田将棋会にて。他のページには、小沼丹や庄野の次男・和也の姿も描かれている。	
33	書籍	小沼丹『井伏さんの将棋』（幻戯書房）	2018年	町田市民文学館蔵		

## 第二章 棋士への関心の高まり～戦後昭和～

34	切り文字	中勘助 俳句「銀やぐら」	1945年 10月25日		疎開も兼ねて移住していた静岡県で、縁台将棋について詠んだ句。出典は『中勘助全集 第十四巻 詩歌』(1990年 岩波書店)。
35	写真パネル	縁台将棋	1953年 8月	データ提供： 毎日新聞社	新宿サービスセンター前に開かれた縁台将棋の様子。
将棋になぞらえた文学論					
36	写真パネル	坂田三吉	1938年 9月	データ提供： 毎日新聞社	
37	直筆物	織田作之助「可能性の文学」原稿		日本近代文学館蔵	※
38	雑誌	「改造」第28巻第4号	1947年 4月	個人蔵	坂口安吾「大阪の反逆」掲載。
39	雑誌	「将棋世界」第11巻第7号	1947年 7月	アカシヤ書店蔵	坂口安吾「名人戦を観て」掲載。
40	書籍	坂口安吾『教祖の文学』(草野書房)	1948年	神奈川近代文学館蔵	「坂口流の将棋観」『観戦記』収録。
41	書籍	坂口安吾『勝負師』(作品社)	1950年	神奈川近代文学館蔵	
42	書籍	太宰治『如是我聞』(復刻版・日本近代文学館)	1992年	神奈川近代文学館蔵	初版は1948年。太宰の絶筆となった評論。
坂田三吉を描いた作品					
43	印刷物	「学園新聞」	1947年 3月21日	神奈川近代文学館蔵	※
44	書籍	井上靖『詩集 北國』(創元社)	1958年	神奈川近代文学館蔵	「半生」収録。
45	書籍	北條秀司『王将』(新月書房)	1949年	神奈川近代文学館蔵	※
46	印刷物	劇団横浜葡萄座公演『王将』チラシおよびプログラム	1955年 7月	神奈川近代文学館蔵	
47	印刷物	劇団青年座『王将』チラシおよびパンフレット	1977年 8月	神奈川近代文学館蔵	※
48	印刷物	劇団青年座『王将』演劇台本		神奈川近代文学館蔵	
49	パネル	西條八十「王将」			歌詞全文を展示。
50	印刷物	「男の夜明け / 王将」楽譜(全音楽譜出版社)	1962年	神奈川近代文学館蔵	

棋士の魅力を伝える					
51	雑誌	「小説現代」第8巻第1号	1970年 1月	神奈川近代文学館蔵	山口瞳「血涙十番勝負」連載第1回目掲載。
52	書籍	山口瞳『血涙十番勝負』 (講談社)	1972年	アカシヤ書店蔵	
53	書籍	山口瞳『続・血涙十番勝負』 (講談社)	1974年	アカシヤ書店蔵	
54	書籍	藤沢桓夫『小説将棋水滸伝』 (文藝春秋)	1967年	アカシヤ書店蔵	
55	書籍	藤沢桓夫『小説棋士銘々伝』 (講談社)	1975年	アカシヤ書店蔵	
56	書籍	藤沢桓夫『将棋百話』(弘文社)	1974年	アカシヤ書店蔵	
57	書籍	創棋界「白雨一創棋界詰将棋 作品集一」 (全日本詰将棋連盟)	1982年	アカシヤ書店蔵	※
58	写真パネル	将棋名人戦・毎日新聞復帰記念 「特別棋戦」第1局	1976年 10月5日	データ提供： 毎日新聞社	※
59	直筆物	井上光晴 創作ノート	1978- 1979年	神奈川近代文学館蔵	※
60	雑誌	「将棋ペンクラブ通信」 創刊号	1987年 11月27日	アカシヤ書店蔵	※
61	雑誌	「季刊将棋ペンクラブ」 第2号	1988年春	アカシヤ書店蔵	※
真剣師、という生き方					
62	パネル	夢枕獏『風果つる街』 本文抜粋			
63	書籍	夢枕獏『風果つる街』 (実業之日本社)	1987年	夢枕獏蔵	
64	書籍	中平邦彦『棋士・その世界』 (講談社文庫)	1979年	夢枕獏蔵	『風果つる街』執筆に際して参考にした資料。
65	雑誌	「kotoba」第43号	2021年春	個人蔵	夢枕獏と湯川恵子の対談「真剣師たちのいた時代」掲載。
66	雑誌	「週刊少年キング」 16巻50号	1978年 12月11日	個人蔵	つのだじろう「5五の龍」掲載。主人公である中学生・駒形竜の家に真剣師の男が現れるところから物語が始まる。
67	書籍	向後つぐお『すっ飛びの桂馬』 1～6巻 (日本文芸社)	1984- 1986年	個人蔵	
68	書籍	団鬼六『真剣師小池重明』 (イースト・プレス)	1995年	個人蔵	

将棋ミステリ					
69	書籍	斎藤栄『殺人の棋譜』(講談社)	1966年	神奈川近代文学館蔵	※
70	書籍	斎藤栄『王将殺人』(光文社)	1974年	アカシヤ書店蔵	
71	書籍	斎藤栄『黒い王将 激闘編』(集英社)	1977年	アカシヤ書店蔵	
72	書籍	斎藤栄『黒い王将 雄飛編』(集英社)	1978年	アカシヤ書店蔵	
73	書籍	山村正夫『振飛車殺人事件』(立風書房)	1977年	アカシヤ書店蔵	
74	書籍	竹本健治『将棋殺人事件』(CBS ソニー出版)	1981年	アカシヤ書店蔵	
75	書籍	本岡類『飛車角歩殺人事件』(講談社)	1984年	個人蔵	
76	書籍	亜木冬彦『殺人の駒音』(角川書店)	1992年	アカシヤ書店蔵	
77	直筆物	日影丈古『将棋を指す鸚鵡』連載第1回目原稿		神奈川近代文学館蔵	『週刊将棋』1984年3月29日号掲載。
第三章 スター棋士の誕生とサブカルへの広がり ～平成～					
78	直筆物	能條純一『月下の棋士』原画		横手市増田まんが美術館蔵	1巻表紙、1巻の氷室と滝川が将棋会館の特別対局室で初めて対面する場面から抜粋した24枚。
79	パネル	大崎善生『聖の青春』本文抜粋			
80	書籍	大崎善生『聖の青春』		大崎善生蔵	単行本(2000年講談社)、青い鳥文庫版(2003年講談社)、角川文庫版(2015年KADOKAWA)、角川つばさ文庫版(2016年KADOKAWA)。
81	書籍	中野英伴写真集『棋神』(東京新聞出版局)	2007年	大崎善生蔵	村山聖を写したページに、大崎がエッセイを寄せている。
82	その他	村山聖八段昇段記念扇子	1995年	大崎善生蔵	揮毫されている文字は「大局観」。
83	その他	『聖の青春』映画豪華版ブルーレイ	2017年	大崎善生蔵	

84	その他	将棋盤、駒		大崎善生蔵	『聖の青春』で描かれている、1997年2月28日に行われた第10期竜王戦1組羽生善治名人(当時)対村山聖八段(当時)戦で、村山が70手目に7五飛と指した局面の盤面を再現した。
85	パネル	瀬川晶司『泣き虫しよったんの奇跡』本文抜粋			
86	書籍	瀬川晶司『泣き虫しよったんの奇跡』(講談社)	2006年	瀬川晶司蔵	
87	印刷物	映画「泣き虫しよったんの奇跡」ポスター	2018年	瀬川晶司蔵	
88	印刷物	映画「泣き虫しよったんの奇跡」パンフレット、チラシ、宣伝用うちわ	2018年	瀬川晶司蔵	
89	印刷物	映画「泣き虫しよったんの奇跡」台本		瀬川晶司蔵	
90	その他	第5回全国中学生選抜将棋選手権大会 名札および優勝トロフィー	1984年 8月3日	瀬川晶司蔵	
91	その他	第53回全日本アマチュア将棋名人戦全国大会 優勝賞状およびトロフィー	1999年 9月6日	瀬川晶司蔵	
92	書籍	山本崇一朗『それでも歩は寄せてくる』1-11巻(講談社)	2019年 -2022年	個人蔵	
93	印刷物	『それでも歩は寄せてくる』第1局扉絵原稿(デジタル)		データ提供： 講談社	第1局扉絵、第10局。
94	その他	『それでも歩は寄せてくる』関連グッズ		個人蔵	
95	印刷物	アニメ『それでも歩は寄せてくる』第1話台本		TBS テレビ蔵	
96	印刷物	アニメ『それでも歩は寄せてくる』第1話絵コンテ		データ提供： TBS テレビ	
97	パネル	アニメ『それでも歩は寄せてくる』美術設定、キャラクター設定		データ提供： TBS テレビ	
98	印刷物	アニメ『それでも歩は寄せてくる』ポスター		TBS テレビ蔵	
99	動画	アニメ『それでも歩は寄せてくる』ティザーPV(60秒)	2022年	データ提供： TBS テレビ	
100	パネル	『それでも歩は寄せてくる』歩・うるし等身大パネル			観覧記念撮影コーナーとして設置した。

101	書籍	伊奈めぐみ『将棋の渡辺くん』 1巻、6巻（講談社）	2015- 2022年	個人蔵	
102	直筆物	『将棋の渡辺くん』原画		伊奈めぐみ蔵	1巻表紙、3巻26話、4巻表紙・13話・20話・28話。
103	直筆物	『将棋の渡辺くん』ラフ		伊奈めぐみ蔵	4巻表紙、6巻2話・3話。
104	直筆物	『将棋の渡辺くん』 カットイラスト		伊奈めぐみ蔵	
105	印刷物	渡辺明名刺		伊奈めぐみ蔵	『将棋の渡辺くん』5巻5話で紹介されている「すみっこぐらし」の名刺。
106	書籍	原作：かとりまさる マンガ：安藤慈朗 『しおんの王』1巻（講談社）	2004年	個人蔵	かとりまさるは元女流棋士・林葉直子のペンネーム。
107	書籍	柴田ヨクサル『ハチワンダイバー』1巻（集英社）	2006年	個人蔵	
108	書籍	羽海野チカ『3月のライオン』 1巻（白泉社）	2008年	個人蔵	
109	書籍	南Q太『ひらけ駒!』1巻 （講談社）	2011年	個人蔵	
110	書籍	原作：左藤真道 マンガ：市丸いろは 『将棋指す獣』1巻（新潮社）	2018年	個人蔵	
111	書籍	鍋倉夫『リボーンの棋士』 1巻（小学館）	2018年	個人蔵	
112	書籍	くずしろ『永世乙女の戦い方』 1巻（小学館）	2019年	個人蔵	
113	書籍	柳本光晴『龍と母』1巻 （小学館）	2020年	個人蔵	
114	書籍	白鳥士郎『りゅうおうのおしごと!』1巻 （SBクリエイティブ）	2015年	個人蔵	
115	印刷物	『りゅうおうのおしごと!』 1巻プロット（抜粋）	2014年 8月25日	データ提供：白鳥士郎	※
116	印刷物	『りゅうおうのおしごと!』 タイトル案	2015年 6月12日	データ提供：白鳥士郎	※
117	書籍	『りゅうおうのおしごと!』 翻訳版		SBクリエイティブ蔵	韓国版、台湾版、ベトナム版。
118	印刷物	アニメ『りゅうおうのおしごと!』 台本、ブルーレイ	2018年	SBクリエイティブ蔵	

## 第四章 多様化する将棋の楽しみ ～平成から令和へ～

棋士の食事・おやつ					
119	書籍	松本渚『将棋めし』1～6巻 (KADOKAWA)	2016-2020年	個人蔵	
120	印刷物	『将棋めし』原稿 (デジタル)		データ提供：KADOKAWA	第1話より11枚、3巻表紙。
121	直筆物	『将棋めし』取材ノート	2019年	松本渚蔵	※
122	写真パネル	『将棋めし』取材写真	2016-2019年	データ提供：松本渚	将棋会館および常磐ホテルを取材したときのもの。
123	印刷物	ドラマ「将棋めし」ポスター	2017年	松本渚蔵	
AIの進歩と将棋界への影響					
124	動画	『AWAKE』予告動画	2020年	データ提供：キノフィルムズ	
125	印刷物	『AWAKE』ポスター	2020年	キノフィルムズ蔵	
126	印刷物	『AWAKE』台本		個人蔵	
127	印刷物	『AWAKE』フロアプラン		データ提供：キノフィルムズ	役者の配置と動線、カメラをどこに置いて撮るかを書いた見取り図。
128	印刷物	『AWAKE』絵コンテ		データ提供：キノフィルムズ	
129	その他	『AWAKE』撮影に使用された将棋駒		山田篤宏蔵	※
130	書籍	芦沢央『神の悪手』(新潮社)	2021年	個人蔵	表題作のほか「弱い者」「ミイラ」「盤上の糸」「恩返し」を収録した、将棋を題材とした短篇小説集。
131	直筆物	「恩返し」取材メモ		芦沢央蔵	駒師の取材のため、山形県天童市の工人・掬水を訪れた際のもの。
132	雑誌	「週刊新潮」第65巻第5号	2020年2月6日	新潮社蔵	「神の悪手」連載第1回目掲載。
133	書籍	若島正『盤上のパラダイス』(三一書房)	1988年	芦沢央蔵	「ミイラ」執筆に際して参考にした資料。
134	印刷物	芦沢央・若島正 往復メール (抜粋)	2020年4月14日	データ提供：芦沢央	※
135	印刷物	芦沢央・飯塚祐紀七段 往復メール (抜粋)	2020年10月20日-24日	データ提供：芦沢央	「盤上の糸」に出てくる棋譜考案のために交わされたやり取り。

136	印刷物	『神の悪手』表現書き分けのためのメモ（複製）		データ提供：芦沢央	雑誌に掲載した5作品を単行本にまとめる際、似た表現を避けるために練り直したメモ。
137	印刷物	『神の悪手』初校ゲラ		新潮社蔵	
<b>エピローグ</b>					
138	雑誌	「Number」将棋特集号		個人蔵	1010号（2020年9月17日）、1018号（2021年1月21日）、1044号（2022年2月3日）。
<b>将棋に魅せられた作家たち</b>					
139	その他	江戸川乱歩日蔵将棋駒（無銘・3種類）		立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター蔵	
140	その他	尾崎一雄日蔵将棋駒		神奈川近代文学館蔵	※
141	その他	尾崎一雄 日本将棋連盟二段免状	1971年10月1日	神奈川近代文学館蔵	免状に署名をしている加藤一二三八段（当時）が自宅まで届けてくれ、その際に記念に一局指したという。
142	写真パネル	将棋を指す中島敦		データ提供：神奈川近代文学館	
143	その他	中島敦日蔵将棋駒		神奈川近代文学館蔵	※
144	直筆物	中島敦創作ノート 断片三十八「聴初汎夜想曲」 漢詩ほか		神奈川近代文学館蔵	ノートの所々に棋譜が書かれている。
145	パネル	古沢太穂 俳句 「いま若き」響かせて 「将棋びと」駒ひびかす	1975-76年		出典は『古沢太穂全集』（2013年 新俳句人連盟）。初出は「将棋」。
146	印刷物	古沢太穂・花村元司対局棋譜（複写）	1969年9月29日	神奈川近代文学館蔵	飛車落ちで対局したもの。
147	パネル	岡野大嗣 短歌「ねばらずに」 「窓辺から」「将棋盤と」			出典は『サイレンと犀』（2014年 書肆侃侏房）。
148	パネル	穂村弘 短歌「新緑の」			出典は『水中翼船炎上中』（2018年 講談社）。
149	パネル	朝吹真理子 第五十九期 王座戦二次予選決勝 第五局観戦記（抜粋）			出典は2011年4月8日-19日「日本経済新聞 夕刊」。

141 「読む将、のススメ展」開催報告

150	パネル	高橋弘希 第七十七期名人戦七番勝負第一局観戦記(抜粋)			出典は2019年4月13日「朝日新聞」。
151	パネル	芦沢央 第七十八期名人戦七番勝負第一局観戦記(抜粋)			出典は2020年6月22日「毎日新聞夕刊」。
152	パネル	袖月裕子 第九十二期ヒューリック杯棋聖戦五番勝負第一局観戦記(抜粋)			出典は2021年6月10日「産経新聞」。

展示風景

